

視点を變えて見るならば、

(ルカ一五・一一〜三二)

氷嚢↓包帯↓眼帯↓サングラス。自転車で転んで腫れ上がった左目の回復は早く、今日は普通に講壇に立てたことを神に感謝したい。しかし眼帯を付けての礼拝は新鮮だった。教科書などでよく言う片目で見ると(視野の狭さ、遠近感の欠如)を身をもって知ったのだから。特に面白かったのはリジョイスでのこと。S兄の後ろにK師がいたのだが、すっぽり隠れて全然見えないのだ。片目であることを思い知らされた瞬間だった。

閑話休題。人が物を見るとき、そこには視座が発生する。高価なものを買う時であれば、前後左右と視座を変えながら色々とチェックすることもあ

るだろうが、普段は見慣れた一点から事物を見るものだ。そこにあるのは大抵「見慣れた風景」であり、私たちに安心を与えるものだ。だが時には視点を變えて見るのも悪くはない。今朝は表題の「放蕩息子」ではなく、その父に焦点を合わせ、父の愛について三つのことを考えてみたい。

一・手放す愛

弟息子の要求は唐突だった。「お

父さん、私に財産の分け前をください」現代日本では子や孫の教育のために生前贈与を行えば一五〇〇万円までは非課税になるなどという制度があるようだが、このたとえ話が語られた当時、生前贈与は一般的なことでなかった。しかも話は息子から父親に持ち掛けられている。失礼な話だ。しかし父はなんとその願いを聞き入れ、財産を分けてやったというのだ。この父は多くの雇人を持つ資産家である。そんなことをすればどうなるかということくらい解らないはずはない。それでも父は弟息子の願いを叶えてやる。大した気前のよさである。だからある説教者はこれは「放蕩息子」ではなく、「放蕩する父」の物語だなどと言う。成る程父は気前が良かった。しかしその背後には愛があると思う。息子に自由を与え、手放す。そのような縛らない愛があつたのだ。

二・耐える愛

それからわずか数日後、弟は蒸発した。「何もかもまとめて」は「すべてを金に換えて」と考えてよい。自由への旅をするのに不動産では仕方ない。やはりキャッシュや貴金属の類が一番だ。そう思うなり弟息子はそれらを全部故郷の店に売り払って出て行った。自分が相続した財産を市場で見る。さぞかし辛いことではないか。それはセンチメンタルバリュ

ーは要らないという決意表明なのだから。だが父は黙って弟の帰りを待つ。来る日も来る日も待ち続ける。この忍耐はまた兄息子に対しても遺憾なく発揮される。放蕩三昧の果てに帰ってきた弟を受け入れた父に怒りを隠さず、「あなた」呼ばわりした兄に対して、いろいろとなだめてみた姿にそれを見るのだ。

三・受け入れる愛

弟は遊んだ。原文直訳では「貯めることなく生活して濫費した」、英語では「勝手ままな生活によって濫費した」となる。数年前、ある製紙会社の御曹司が文字通り放蕩し、百億以上のお金をバカラに投入したというニュースを思い出すが、まあそんな調子だろう。あつという間にすべてを失い、弟はようやく気づいた。帰るべき場所、愛のある家の存在を、だ。とはいえ彼にもプライドがある。今更おめおめとは引き返せない。一寸の虫にも五分の魂と言うではないか。彼は必死で一つの取引を造った。それが「あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇人の一人にしてください(一九節)」である。しかしどうだろう。まだ遠くにいた哀れな息子を見るなり、走り寄って抱擁した父に対して、弟息子はそれを語っていないではないか。少なくとも今日における聖書本文はそれを支持している。なぜだろう。答えは簡単、「もういい」

だ。父の愛は受け入れる愛、無条件の愛である。ひとたび人が神のもとへ帰ろうとするならば、その人を奴隷ではなく、子として迎え入れてくれる。そこには一切の取引は不要なのだ。

* * *

目のケガを負いながら、車のことで忙しくした一週間だったが、素敵なことばに出会った。それが「こと売り」である。セールズ氏曰く「僕はただ車を売ってるんじゃないのです。車を通して開かれるであろう大坂さんの未来を売ろうとしている」のだそうだ。「大きく出たなあ」と思ったのだが、セールズ氏が帰り、オフィスに入って考えていると、突如腹にすんと落ちた。「ああ、伝道こそ究極のこと売りじゃないか」と。愛なき世界に父の神の究極の愛を伝えること。これは伝道だ。しかし父の神の愛がイエス・キリストのことばと行いによって示されたことを考えるとき、私たちが単に神の愛を理窟として語るだけでは不十分だ。この父の神の愛を体験したものはその体験を語ることが大切だ。更にその愛に生きることもまたなすべきことだ。私たちの内に相手を自由にする愛が、耐え忍ぶ愛が、そして受け入れる愛が満ちるなら、福音は伝わるはずだ。父の愛の素晴らしさを知り、その「コト売り」になろうではないか。アーメン。